

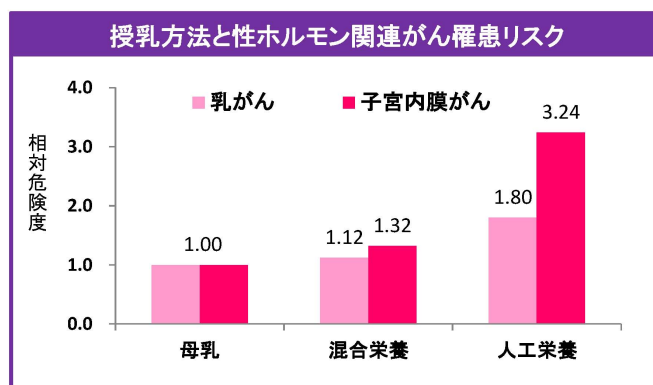
授乳方法と性ホルモン関連がん罹患リスク：大崎国保コホート研究

Lactation pattern and the risk for hormone-related female cancer in Japan:
the Ohsaki Cohort Study

2013 年 European Journal of Cancer Prevention 発表

人工栄養による授乳は母親の乳がん、子宮内膜がんのリスク増加と関連する

母乳による授乳は母親の乳がん罹患リスクを低下させることが知られていました。しかし、子宮内膜がん罹患リスクへの影響について、疫学研究の結果は一致していませんでした。本研究では、大崎コホート研究のデータから日本人女性における授乳方法と性ホルモン関連がん罹患リスクの関連について研究しました。その結果、母乳栄養と比較して人工栄養を使用した授乳方法では、乳がん罹患、子宮内膜がん罹患リスクが増加することが示されました。



研究データについて

ベースライン調査：1994 年 10 月から 12 月に宮城県大崎保健所管内に居住する 40～79 歳の国民健康保険に加入している女性 28,515 人を対象に自記式調査票を配布し、生活習慣や健康状態に関する質問に回答して頂きました。有効回答率は 95%でした。

追跡調査：ベースライン調査に答えて頂いた方のうち、追跡開始以前に国民健康保険から脱退した方、がんの既往歴がある方、未産者、授乳方法の回答に不備のあった方を除外した 19,848 人を対象に追跡を行いました。ベースライン調査時から 2005 年 12 月 31 日までの 11 年間の追跡を行い、宮城県がん登録との照合により乳がん罹患 148 例、子宮内膜がん罹患 32 例を確認しました。

授乳方法に関する質問について

ベースライン調査では、出産経験者に「どのような授乳方法でしたか」という質問を行って授乳方法を尋ねています。回答は「母乳のみ」、「人工栄養（ミルク）のみ」、「混合」の中から選んで頂きました。そこで、本研究では「母乳のみ」群を基準として他の群の乳がん罹患、子宮内膜がん罹患リスクを比較しました。

他のリスク要因の影響について

本研究では、授乳方法と性ホルモン関連がん罹患に関連すると考えられている要因の影響を考慮して結果を算出しています。具体的には、年齢、BMI、がん家族歴、学歴、喫煙、飲酒、歩行時間、総エネルギー摂取量、閉経状況、初潮年齢、初産年齢、出産数、経口避妊薬使用の有無、ホルモン療法の有無といった要因についてグループ間に偏りがないように、統計学的な処理を行いました。

研究の特徴と限界について

本研究の特徴としては、①日本人女性を対象とした大規模調査の結果であること、②質問票の回答率が高いため選択バイアスが小さいこと、③罹患データの照合に使用した宮城県がん登録は精度が高いことなどが上げられます。一方、研究の限界としては、①授乳方法についての回答は自己回答であること、②授乳期間や人工栄養の種類、混合栄養中の人工栄養の割合などについては調査されていないことがあげられます。